



婦

女

鑑

四

9
3924
4



門 口 9
號 3924
卷 4

婦女鑑卷四

目錄

楠正行母

清水太郎左衛門母

湯淺元禎母

成田喜起母福島氏

小出大助妻惠知子

魯季敬姜

鄒孟軻母

楚子發母

婦
女
鑑
卷
之
四
目
錄
〇
一
宮
内
省
藏

早稲田大學圖書館
昭和29.4.23
藏書

魏芒慈母

齊田稷母

齊義繼母

王孫氏母

程文矩妻

陶侃母

二程母

舌弗爾の母

華聖頓の母

俄義的の母

忠女福

藍巴耶

白命透

若安達亞克

撒拉倍涉

亞俄底那

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 白命 and 女）

婦女鑑卷四

楠正行母

延元元年五月。楠中將正成。攝津國兵庫の湊川。小
て戦死をり。のねてよ。このたび乃合戦を最後
とねをひ定めけむ。その子正行僅十一歳。な
りける。遺訓して。櫻井の驛より故郷。小還しけ
る。正成戦死して後。尊氏その首級を贈りし。る。は。
妻。子家人ども。あねて覺悟の事。おまども。こまを
みて。い今更のやう。胸ふさがり。眼眩きて。涙の

婦女鑑 卷之四 宮内省

いろもあらざるばかりなりき。正行を聲をのこして
 持佛堂の傍カマクラにゆきけるを。母あやうして陰カミの小
 これをうかゞへば。父の遺物の刀をぬきとち。も
 かまの腰をたしめて。そでお自刃オノシノし及むんこ
 す。母いそがせよりてその手をおさへ。涙をこ
 らひていひたるを。汝よくさけをさかぐろるよ
 もよくおとく。故判官兵庫へ向ひし時汝を櫻井
 驛トウラよわかへし。をあと吊トラせんとせん為よあらす。ま
 た腹されとの事よも何らど。正成運法きて戦死
 すとも。主上いづかよもおとすますと聞法と

へたらんもを。残りたる一族郎黨どもを扶持し
 おき。今一たび軍をおとす。朝敵を殄滅チンメツし。主上の
 宸襟チンキンを安め奉せとこそいひつらめ。さるをいつ
 の間よあらわれつる。汝をさなくとも父の子な
 らば。こそやどの理マコトも迷ふふといよもあらど。と
 ろつといいさめ。かつをまぢましつ。そちたる刀
 をうむひれば。正行そのまゝなれたふを。母と
 共おぬし志げしけるを。こそより後正行母の教
 訓を體し。父の遺志を續ツグぎ。苟且カウジの遊ユウ戯ギも朝敵を
 せめふせ。何るいうちなびくるの意あらざるい

婦女鑑 卷之四 〇二 宮内省藏

なり。それより後も母よろづよろづを配りて
そだてあげ。一族家人をも懇こままなさせをうけ
るより。正行廿三歳およびける時。軍をおお
して朝敵をうちおびけ。父もおとらぬ武畧をあ
らそし。大いよ南軍の武威をかおやあし。ま
たく母の教訓およま。

清水太郎左衛門母

相摸の北條氏政の臣よ。清水上野介といひて武
勇の聞えある士あり。その妻も相摸國の生を小
て。まゝめて力はよき婦ふりけり。一子をうむ。こ

れを太郎左衛門とよべり。母より傳へて膂力人
よまぐまゝあり。おのきを恃たて人よふあり。傲
慢無禮の事のおほのわき。母これをうまぐ。い
たくいましめていそぐ。力強くして先陣よま
み。手づあら敵をうついにま匹夫の勇なり。大將
の器よあらず。楚の項王いちから千斤の鼎カチを扛
ぐるよたるも。烏江の軍敗イシヤきて命をおとす。漢の
張良をその身軟弱ナシなりかども。智謀人よまぐ
きて。克く百萬の強敵を挫トげり。されば一方の大
將ともならむと欲する者の肝要なるを。一己の

カよ何らば。威ありてたゞからず。勢よふりて人を侮アホらす。義を守りて禮を正う。人を何それと恩惠をほどこし。寡欲よして色よ溺オホまを。軍法武畧を鍛煉シして。敵をなびけよとぶふるをぞよ紀士といひつべき。さるをたのガ力と恃タてて人をあなどり。傲慢無禮ならむよを。禍ガかならず家小およびて。汝が父上野君の武勇まをを黷ガまべし。といふくもちしめいさめしあべ。太郎左衛門大い小おのまの過アチを悟サトり。前非をくいく。そのちを川狩鷹タカづり等の何そびをやめ。一室よこも

りて軍書をよこ。軍法を講コしけるやどよ。智勇兼備の士となりて。世の人あまをおそれおもんどけり。さてらの母の強力なりし。一日そのまうでして。坂口よか。里々る路よ。大きある牛の米俵タふとの法々たる。何とあしをあげおよりふみまづして。わづら小岩よどふか。里々るとまりたる小荷繩ニをきりとのむ牛を谷底へ墮オて死ぬべし。ざりとて引あげむやうなけれむ。牛ひきいあきれまどひ。牛の息よなりてあえぎあへり。太郎左衛門の母らまを見てあまをこらふへ

ぞ。あたり此人を志りぞけ。徐シヅカあふ輿コよりおりて
 たゞひとり。牛の傍カタハラもたちより。荷をつけなごら
 牛をいだきて。あるどととらげ。道の真中もひき
 たてたり。こまを觀ミるもの目をおどろあし。舌を
 またぐねまたりとぞ。かゝる怪オドロク力のうまれつ
 きなまは。豪氣ガウキもてあらたゞし。死むかりならん
 を。道理よさどく慈愛ふあし。故ユ。その子を
 教へて血氣の勇をおさす。智を磨ミガき義を重んぶ
 るかこふ。みちびきさせるゆ。たゞひすくおきこ
 とおこそ。

湯浅元禎母

備前國岡山の藩士。湯浅元禎の母瑠璃子也。同藩
 の人瀧陳良の女なり。幼き時父に從ひて江戸に
 申た。年經て國に歸りし。僅わずかの八歳の時ありし
 所。天性英敏ふして。道すぶら山川の景色宿驛の
 形狀を諳記して。わするゝおとなかりき。二十八
 歳の時湯浅英に嫁して元禎をうめり。英を藩の
 目付職に在りし。志をく江戸におゆきて公務
 に従事す。瑠璃家よりてよく家事を理め。年を
 へて怠おこらさず。英やゝ年おいて職をあらへし。つね

お病牀に在り。瑠璃日夜側^{カタク}に侍り看護おこしを
 をつくし。何事も夫の欲するところよ忤^{サカ}まず。六
 年の間一日のおとくいさわりかへづきし。醫
 薬もその効おくつひよ身まかりよけり。この時
 元禎よい。未だ妻をむらへしめず。とづあら家事
 をたあさどり。かさはらぬひもり此業まていさ
 さのも怠るおとなく。暇何をばからやまとの貞
 女節婦の傳を誦し。何るひを歌をよと。筆をひき
 てそを娛^{タシメ}とし。奢侈を惡きて。浪費^{ツシ}をそふき。人の
 窮乏をきくても親疎^{シンソ}をいはずこれよやどあす

おとを好めり。元禎外よいで。何そおこと何れ
 ば。あへりて後其あましやうをどひ。益あるおと
 いふきと賞め。害あるをば將來を戒め。深く子を
 いとほしむといへども。いとゆる姑息の愛よお
 ちいらす。偶^{トキ}元禎の朋友の來ること何まば。喜で
 これをきてあり。などそのあまらづひの切お
 ること。筆よも詞よも乃べおし。元禎いとをさ
 おき時らき小謂^{コカク}りけるも。昔一條天皇の御時。上
 東門院といへるきさいの宮の女官よも。何まよ
 才かしこきそのあまし。冬のところ雪いとおも

いろりふりけきい。主上をみそあとして。香爐
 峯の雪をいふと勅ありしは。清原少納言と
 いへる侍女。やめて御簾を捲きてそのまぶら
 り合奉りしとぞ。古の人を婦女すらかゝる博學
 の才ありなり。まいて男子をいふ及むず。さ
 れば人としてをさあき時よりよとかさをつ
 とめはかきて。人の爲にあなどらるゝやうのお
 と何るべからず。なとつねに教へさとしてけり。年
 おいて病ふふしとあど。つねに書をこのきてよ
 りふけし。就中貝原益軒が岐岨路の記をば。

をさなきと記經過せしとらるの紀行なきは。志
 むしもこれをまふたで。枕べよねき。寛保元年と
 いふと。齡七十二にて身まられり。

成田喜起母福島氏

尾張藩の附家老成瀬家の臣。成田喜和と云も
 の何しけり。その妻福島氏。年十九にて此家よ
 嫁し。廿五にて夫を喪へり。後寡居してよく舅小
 奉事し。幼兒を鞠ひ。家を治むるふ其宜を失せず。
 殊小その子喜起を教育するおと甚ど嚴し。ふし
 て。文武の道いづきも良師をえらびて學むしめ。

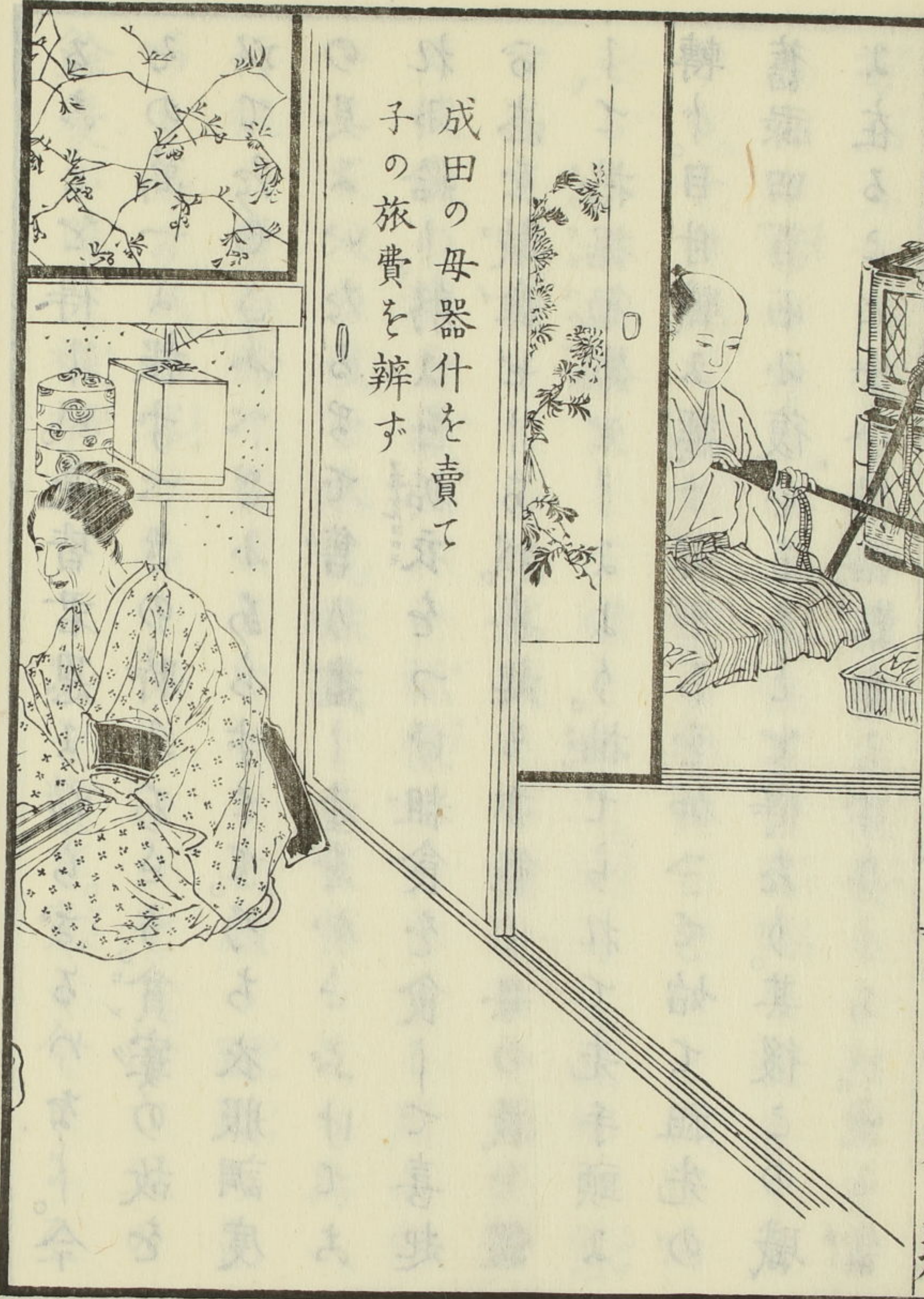
苟且カクジも淫靡インビの歌曲を唱ナへ。猥褻ワイスのくちどきく
 おとと禁イミめけり。福島氏性甚シど雷鳴ライメイを畏オソまし
 ども。子の視ミて其怯ケま慣ナれおとをおそれ。雷鳴
 するおと小端坐コヘンザして襟エを正ただし。少シあも畏怖オソの態スガタ
 を為ナさず。かくて喜起成長キキチエイして年二十ニ及ツび。始
 て使番シヤンの職シヨクを獲ユ。江戸エド小祇役コギヤクせんとする時。其幼
 小コして父の後ノチを承ウケけ。禄減ロクゲンして家貧ケヒしきふ為ナり。
 行程ケイテイの費ヒの給キふときをおそま。頗シる蹶踏ケツダの色
 何ナニわらば。母容カノチを正ただしていへるやう。汝亡ニ父の
 餘慶ヨウキョウ小因コインり。襤褸レンシの中ノチ家ケを襲ツぎ。竟ツキも今日ケフも至

るおとと得エし。是皆君恩キミオンも何ナニらざるいなり。今
 その萬一マンイツ報ヒすべきの時トキあさり。貧窶ヒンクの故ユを
 以モてたゆふべきあらずとて。乃スち衣服調度イフツツドウ
 の具ツグもいたるまで售ウり盡ツし産ウをかこぶけてお
 れお給キし。躬ミまを垢衣カウイをつけ粗食ソシヨクを食クして。喜起
 お志シを鼓舞コブウせしむ。喜起も亦能ナく母の教ケウを體タ
 して拮据キョコ勉勵ベンレイせしより。抽ヒでられて先手頭サキテも
 轉マり。目付職メツキも遷ウツり。禄百石ロクヒヤクシヨクを加カへて始ハて祖先ソゼンの
 舊禄キウロク四百石シヨウヒヤクシヨクも復ヒするおとと得エたり。其後キノチこの職
 も在アること十八年カハチヤウネン。恪勤カクキン怠チらざりしむ。竟ツキも當



楓湖

〇十



成田の母器什を賣て
子の旅費を辨ず

家の顯職ののり。俸祿八百石となせり。是は於て喜起大に喜び。今より後を厚く母に奉事するおとどうべしといふ。福島氏これをまゝていそく。我よく汝をしておとに至ることとせしめし。悉く君の恩澤あり。汝よく父祖の後を承け以て此に至りし。こそ汝の勤功あり。されば我よおいて何の力のあらむ。汝今より後もよくその職を努め。失墜蹉躓することあらす。わが願すでは足せり。されば特に飽食煖衣徒に君の賜と浪費するおとたは固より願ふところあら

らむとて。終身その素志を更へず。天明丙午といふ年。齡六十九にして身まかまり。

小出大助妻惠知子

惠知子。徳川幕府の臣。淺羽共常の第四女あり。廿一歳の時小出大助に嫁せり。品行よくをさまりて。はねまたもふを何とぶことと好まず。驕り高ぶることとせしめり。又舅姑に事ふるはいと懇よよくその子を教へ。儉素を守りて家事を治めし。おだ。夫をしてはねよ内を顧るの累なく。よくこれ劇職にあたえて。顯榮の地位を占むるの機

會をえしめたり。大助を微賤より起りて代官郡代等の職を経。竟に二、九留守居の職を獲ぬ。恵知子其子を教ふる小尤らるるを用ゐたり。若し諸子の中よ。文武の課業を怠ること阿まば。ねんぶる小おまふさとし。なや用ゐぬとたい。自らその身をせめて曰く。わまねらるゝふてかく此ごとた游惰の兒をうめり。といひて泣きささげびやまば。兒子これよ感悟してその行を改め。復び懈るよとふかりき。又嚴冬のころ。諸子毎朝もやくより。射騎槍劍などの演場よ莅むとたい。恵知子必自

ら起て湯をわらふ。粥などころのへて食せしめ。かりふも婢僕などふい委ねざりき。かく勉め勵きておまを教育せしよより。阿またの子成長の後。世よ用ゐられて。みお良士となりしとぞ。

魯季敬姜

魯國の季敬姜の莒の女して戴己とよべり。魯の大夫公父穆伯の妻よて。文伯の母ふり。博達ありて禮を知まひ。穆伯もやう身まかりて後。文伯いふ。學び。年經て家よかへまひ。母の敬姜これを見らふ。文伯よ從ふところの友人らふ。文伯よ接

するさまいと嚴オコシのふして父兄より事ふるが如く。
 文伯いぢぢぢと倨傲キョウガウよりして自得の色あり。敬姜
 文伯をよびていまゝめけるを。昔武王朝より罷
 りて。絲綵ハカマ、ヒモの斷キきするを結むすむしめんと左右を顧
 るるふ。近く侍する人の中よりこまをむすび
 むべきものあらねば。自らこれをむすび給ひき。
 かく尊敬をべき人よのこまはりし故よ。能く
 王道をなせり。桓公を坐友三人。諫臣五人。日ごと
 よその何やまぢをあげて論ずるとの三十人。あ
 たり近く侍りし故よ。能く霸業ハゲツをなせり。周公を

一たび食して三たび嘔吐を吐き。一たび沐して三
 たび髪を握るといふごとく。さづら顧りて
 政をつとめ。又贅ニをとりて窮閭隘巷キョウロクアイコウよいたり。道
 をさく教をうくるもの。七十餘人の多きお及ぶ。
 故よよく周室を保てり。古の聖賢とよむる人
 すら猶かく此おとく。その友とするところ皆お
 のきおまされるものなり。さてこれを知らずく日
 毎よ益あるおといとおなかるべけれ。今汝年わ
 らく位ひさくして。それともやし何をぶらぬの
 みおたのきおしるものなり。これを益友と

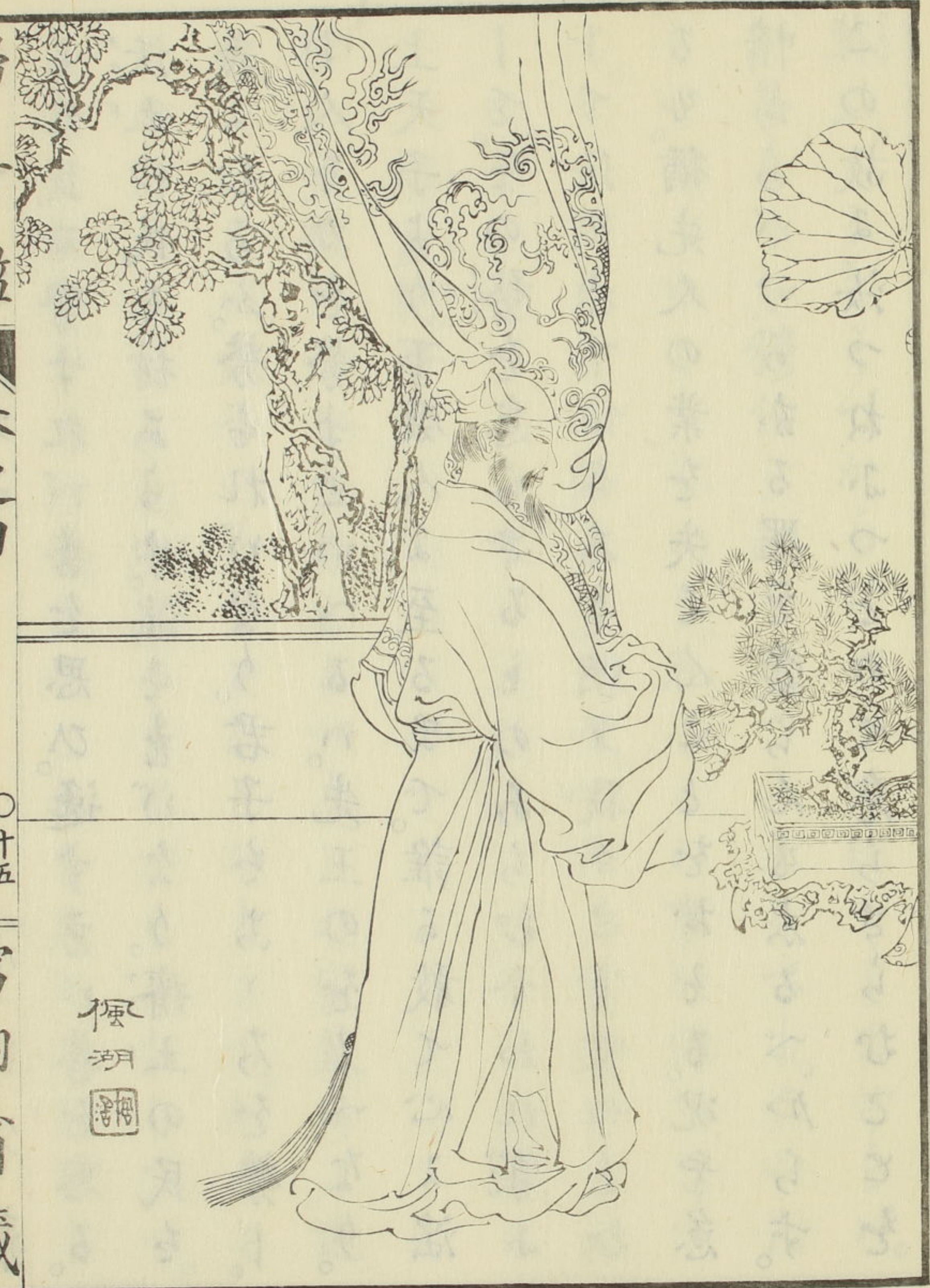
いふべからず。とことわりをつくりていさめけ
 まば。文伯その過を謝して。とづからくいあらさ
 め。それよりのちを師としはうふべき人。おの
 賢才の友をえらびてまどそりけり。かゝりけれ
 ば。その友皆かゝらふ雪をいさぐくなどの長者
 なまば。文伯のさちをたゞし。親より贅をとりて
 うやまひたる。敬姜これを見て汝の學なる小ち
 ろしとてよろこべりとぞ。かくて文伯魯の丞相
 となりて後。朝より退りて母を見ゆる小績して
 有りければ。文伯恭しくいひたるやう。今身不肖

かまども魯と相と一つらふるを。その母よして
 猶紡績を事としたまふはいつのいからど。お
 そらくわたのまふして。母ははふる此道をか
 くおと有りや。と問ひけまば。敬姜嘆きていふや
 う。魯國亡ふる小ちからんり。かゝる不肖の吾
 子よして。官よをらしむるを何やふさおとなり。
 汝さらずや。いふへの聖王賢主よして。民をを
 さむるものを。瘠土をえらびておまよおさ。民を
 して力を勞せしめ。おのしておまを用ゐられま。
 このゆゑよ長へよ天下よ王たるおとを得たり。

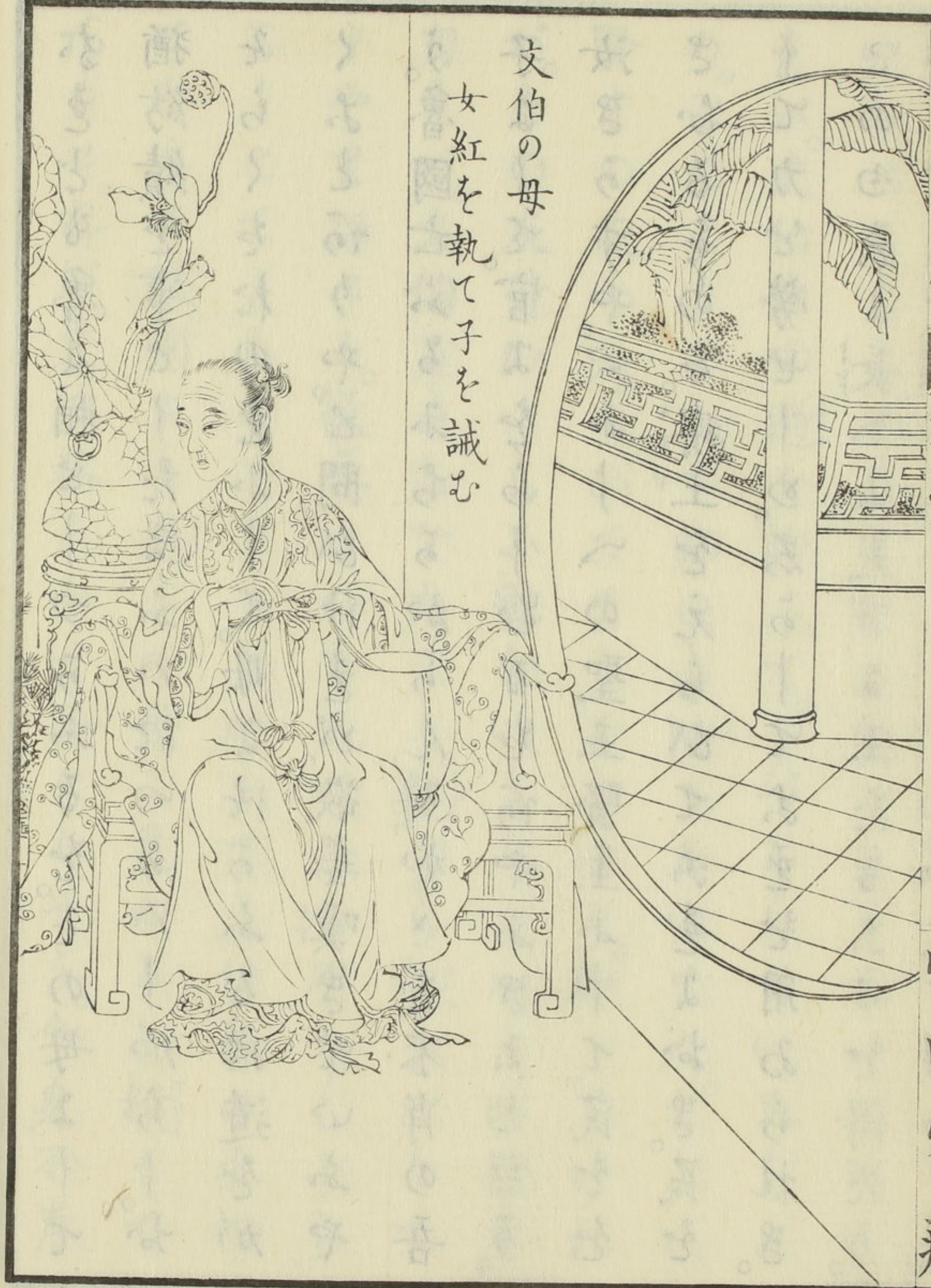
婦
女
鑑
卷之四

〇十五

宮内省
藏



楓湖
印



文伯の母
女紅を執て子を誠む

婦
女
鑑
卷之四

宮内省
藏

それ民を勞すれば善を思ひ。逸すれば善を忘る。
 沃土の民を材あらず。淫をばなり。瘠土の民を
 義をむらふ。勞さればなり。君子をふらるを勞し。
 小人を力を勞すといへる。先王のをしへなり。
 上天子より下庶人に至るまで。誰の敢て心は淫
 して。その務を怠らざるものあらむ。今われ寡ふ
 して汝も亦下位にあり。朝夕孜々としてつとむ
 るも。猶先人の業を失ふんことをおそる。況や怠
 惰あらばいのかる罪を蒙らんも志るべからず。
 この故は汝つねふつとめて怠らざらむことを

冀ふ。さるをうづからおどりては。いまざらば。
 おそらくを穆伯の嗣を絶つに至るべし。といた
 くいましめさとしり。孔子この事を傳へきつ
 て。その門弟子に語りきらせ。いたく賞讃せられ
 しとぞ。
 鄒孟軻母
 鄒の孟軻の母を孟母とよべり。その家墓所は近
 かりけき。孟子いとをさあきやどよて。かりそ
 めのたいふまよも。埋葬のさまども見あらひて。
 そごまねをぞしける。孟母これを見て。子ををし

ふるものゝをるべきところならずとて。家を移して市街よすこけり。孟子まよあきあひの業を見あらひて。そあさまどもいけまを。こゝをもしりてこたびも。學校のかとばらふ移りけるよ。孟子俎豆をつらね。揖讓進退のさまども見あらひて。いと殊勝なりいあは。孟母をトめて居處をここに定めけりとなん。孟子なわいとけなりのりいなど。家をいぞ。學問いなるふ。いまご成業にいたらずして。家よあへりいとき。をまもも孟母機をたりにありけるあ。その學び得いさまどもと

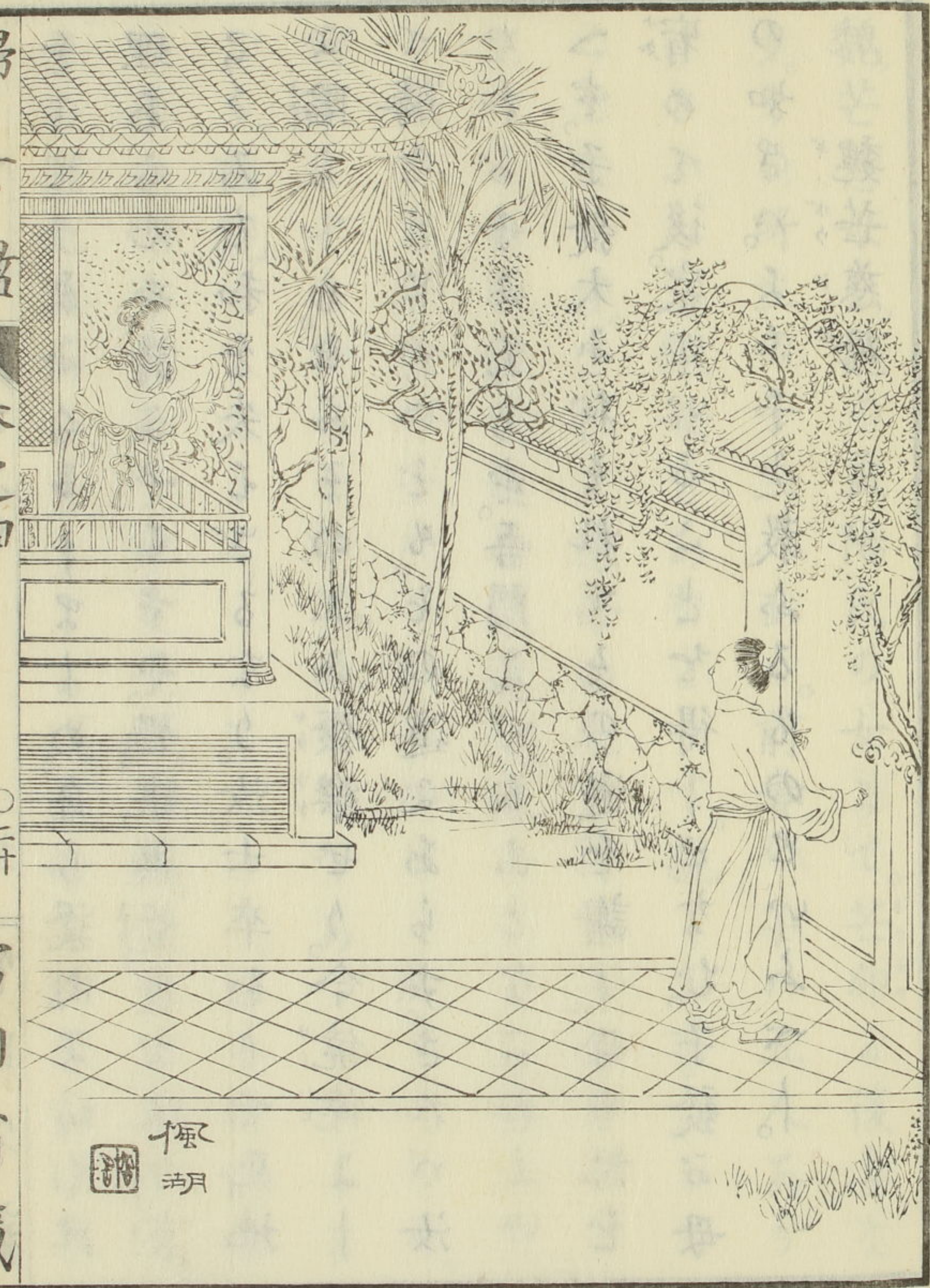
問ひけまは。孟子まとのまゝあるを答へけり。孟母やおて起ちて刀ととり。たりにかけたる機をなをむより断ちいあは。孟子愕きてそのゆゑをといひよ。孟母曰く。汝今學を廢して家よ歸るい。今この機を断つおよとならず。汝まあずや。君子を學で名を立て。問ひて知を廣む。故よ居れば即ち安く。動けば即ち害よ遠さかるといへり。今汝學問を廢ま。これ終身厮役を免ますして。禍を求むるありといへど。孟子深く愧ぢ懼ま。旦夕つとめむげきて怠らず。子思を師として學びなれば。汝

ひよ名を成さ小至きり。既おして孟子妻をむらへ。何る時室よいらんとせしよ。その妻祖ぎてうちくつろぎたる状なるを。くろよからぬ事におもひ。内よいらでそのまゝ小すぎけきべ。妻孟母よ辭していひけるい。夫婦の道を私室何づあらずときけり。今妾竊ら小室よありて。うちくつろぎけききをやその侍りしよ。わが夫これを見てさりたまへり。これ夫婦の道よあらず。さればいとまたまむりて。父母の家小歸り侍らむといふよ。孟母これをききて。やがて孟子をよびてさ

どしけるを。禮よ將よ門よいらむとする時を。先そのあるところを問ふ。敬をいたすめえんなり。將よ堂よ上らむとする時を。必まづ聲をあぐ。人を戒むるなり。まさ小戸よいらむとするときハ。かあらず下を視る。人の過を見んおとをたてるまひなり。今汝とづから禮よよらむとて。禮を人に讓むるを何るまときおとならずや。とよまよめけきべ。孟子身のあやまちを謝して。其妻をよめけり。されば孟母を稱して。よく禮を知りて。人よ母たるの道よ何さらかありといへり。

楚の將子發。秦の國を攻ける時。糧食つきて兵卒
うゑふ。るゝゝゝ。使を本國に遣して。糧食
の輸送をこひ。あませて母の安否をよほしめけ
り。子發の母使よりひて。士卒のありさまをとふ
よ。使者いそく。糧食乏しくして。梁粟をくらふこ
とあたはず。あづく菽麥などをわらちくらひ。う
ゑをゝのぐまでなりといふ。又將軍子發をとふ
ふ。こゝふるやう。將軍を朝夕牛豚黍粱を食して
かゝるふとあしといふ。あくて後。子發秦を破り。

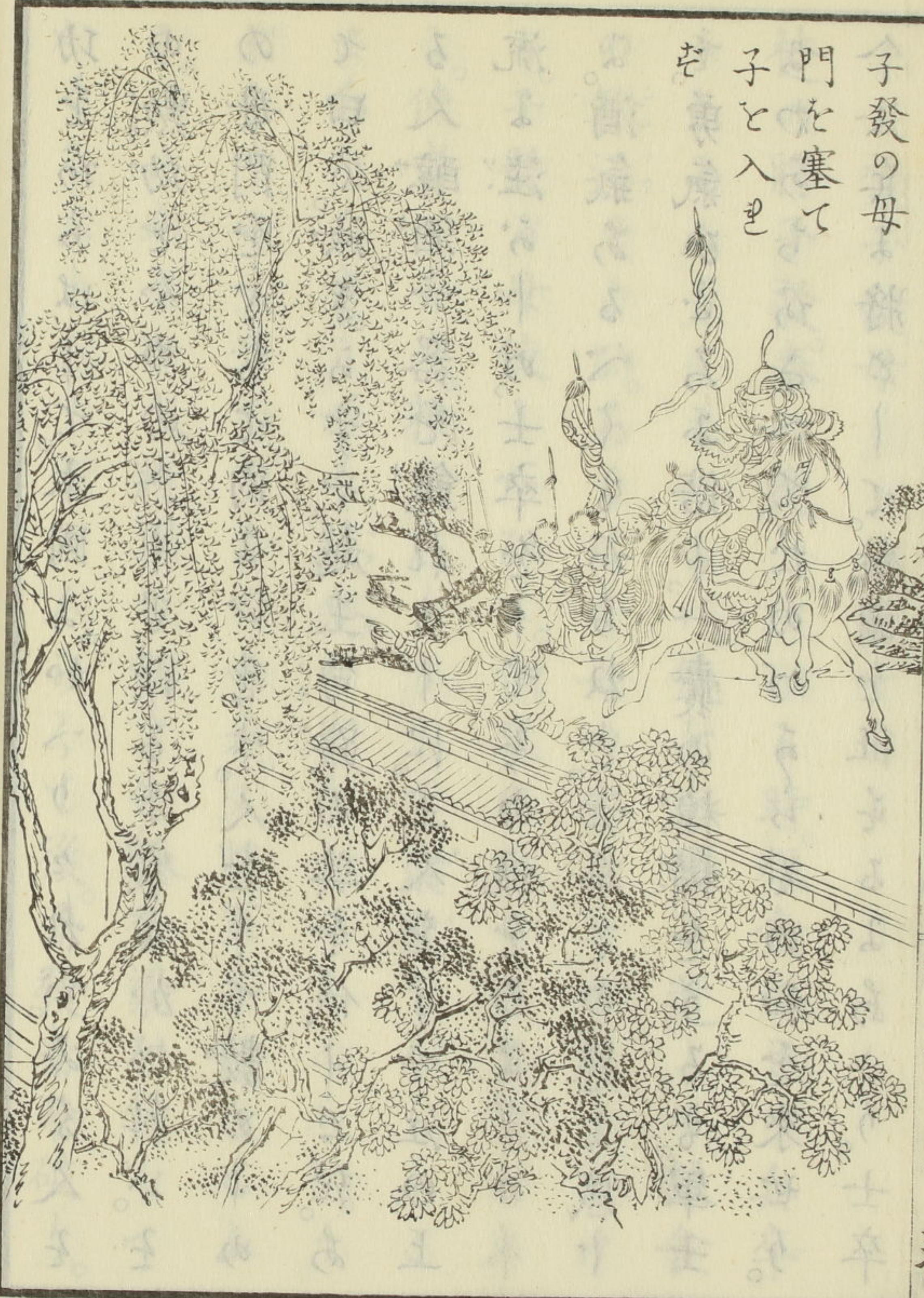
功を何らはして。本國よかへりければ。みふ人を
の勲功をよめのゝゝとけるふ。家よかへれば。そ
の母門をせむて内よいそす。人をして數めしめ
て曰く。汝まゝあすや。越王句踐の呉を伐しとた。あ
る人醇酒一器を餽れりしに。王、人をして江の上
流よ注ぶしめ。士卒をしてその流をのましめし
よ。酒氣あるべくも何らねど。士卒その恩よ感ト
そ。勇氣ひそるふ倍し。一囊の糗糒をうるも。軍士
よわらち何とへて。たのづららその和を來せり。
今汝兵よ將として。敵國を征するよあさり。士卒



〇二十

楓
湖

子發の母
門を塞て
子と入る



をいてう忍小るし一せしめ。自ら梁肉は向く此
 理あらんや。詩よひもせずや。好樂無荒良士休々言
 ころるを和を失もざるなり。汝士卒をして死地
 へ陥らしめ。自らその上は康樂せり。今僥倖よ
 て勝をうといへども。その道はあらず。されば汝
 いわぶ子よあらず。吾門よいるおとなれとい
 へど。子發大小おそれてその過を謝し。母の怒を
 宥めて後家よいることを得しとなむ。子發お母
 の如きい。よく子小教ふるものといふべし。

魏 芒 慈 母

魏芒慈母也。魏の孟陽氏の女よて。芒卯ボウボウお後妻な
 り。その所生の子三人あり。前妻の子は五人あり
 ける小。みお繼母をあなどりて。親しと事ふるお
 とをなさず。されど慈母の之を待するおといと
 あつく。衣服飲食起居進退も。殊小こゝろをほく
 し。おのお所生の子は。これとひとしからしめど。
 何事もいとおろそかよのともあつらひしあ
 ども。猶親しまでうとくしありけり。ある時前妻
 の子の仲はあたりける子。國の法令をとあして。
 その罪死よあさまりしあは。慈母これをあげき

かなしと。いふもしてその罪を免されむことを
 を希こぼひ。いたく心を苦しめて。二重の帯の三重よ
 なるまで。悴せせおとろへたるを。見る人あやして。
 いろでかくまでい憂ひふふしてたまふらんと
 いへど。慈母答へて。此事を妻が所生の子なら
 ざ。さむの里いなげさむ侍らトを。今前妻の子
 の死罪よあたまるを。いふもして救まざれば。
 義よおいて母といふべからず。慈とまべあらず。
 慈と義とをわされてい。いふでかせよたくるべ
 きといへり。此事たのづから國王ふきこえけき

ば。王その義を重んぶるのあつさふ感ト。其子の
 罪を赦して家よ還らしめけり。これより後をか
 の五人の子も。慈母を尊敬して親しつゝあけ
 り。慈母ますくあされまめぐきて。禮義を以てあ
 まを導みちき。これよ教へけるほどふ。後よい彼是の
 分ちなくむつび親しつゝ。つひよ八子ともこ
 ふ抽ひでらきて。魏の卿太夫の列よ備されり。

齊田稷母

田稷子も。齊國の丞相なり。ある時其下づかさよ
 り黄金百鎰いといふをうけて。これをその母小遺お

きり。母曰く。汝丞相となりてわづらふ三年よま
 ぎぞ。さればその得るところの祿をいまどかむ
 りり此多き小至らド。これを下よ受くる小あら
 ずバ。やあよ得るところあるべあらずといふに。
 稷子、實を以てつげらバ。母曰く。吾聞く士を身
 を修め行を潔く。苟も得るおとせむ。情を竭
 一實を盡して詐偽を行ふとす。非義の事ハ心よ
 計らず。非理の利を家よいさず。言行一の如く。情
 貌相副ふといへり。今君主。官を設け祿を厚く
 て。以て汝を待ちたまふ。宜く言行を肅みて以て

君恩よ報むべし。それ人の臣としてその君よ事
 ふるも。猶人の子として其父よ事ふるお如く。力
 を盡し能を竭し。忠信ふして欺るむ。務めて忠を
 効す小あり。死を輕んドて命を奉ド。廉潔公正な
 るべし。凡かくのおとくならむ功成名遂げて患
 を遺すおとならん。今汝これよ叛きて忠よ遠
 ざられり。人の臣として君よ忠あらざるハ。これ
 人の子として孝あらざるなり。不義の財を吾有
 小あらず。不孝の子を吾子よあらず。されバ家よ
 とらむべき小あらず。いづらへもたちさるべ

一。とことわりあきらかよせめしむを。稷子ふら
く慙シたそれ。やぶてその金をもとの主よかへし。
罪を宣王よ自首して。刑よ法おんことをこへり
しよ。王その母の義を重んぶるのあつきを賞し。
遂小稷子の罪を宥めて。ととの相位よ復し。公金
若干をその母よたまされり。

齊義繼母

齊の宣王の時よ。道路よ鬪ト殴して傷を被ふり死
せるものあり。捕吏其場よ臨きて檢するよ。これ
ところせるものとたがひく。二人の兄弟ありて

その傍カキよたてり。因て糾ト問ふよ。兄をたのきこ
れを殺せりといひ。弟をおのきこそこれを殺せ
兄よいあらどといひて。あたふその罪よ何と
らせと何らそひられ。法官一年を過るもこれ
を決まるおと何とせず。この事いあせまどと
國の大夫よ裁決をこへるふ。大夫も決するおと
何たせず。つひよ宣王よ聞えあげつるふ。王いと
く。さらば兄弟ふらりとも其罪を赦すべし。彼等
罪ありとも其疑ツミナキモノを誅せむ。あるひを無辜
を殺さんのおそれあり。されどこころとあられ

等兄弟の母をめてこれよとへ。必その子の孰か善く孰の悪しきをば志りぬべし。といひけをば。大夫やめてその母を徴して。兄弟互に死に代らむといふ。孰をを殺し。孰れをか活らさんとねふぞ。そのねふところと言へ。ととひ試といふ。その母なく少きものところたまへといふ。大夫又問ふ。少なきもの人の愛するところあるを。今こそを殺せといふ。何故なりや。母いそく。少きもの妻を子にして。長を前妻の子なり。彼の父病にて死するの時。妻を托して善く

之を養へといへり。妾これを諾なひ。とてごる撫字して。長せしめたり。故よこれを殺して信を毀るおとあたらず。はと兄を殺して弟を活らさば。私の愛を以て。公の義を廢するなり。信を毀り義を廢せば。何を以てお世おたさるべき。さればわが子を殺すを痛まじかざりなれど。信と義とよの易へあたらず。と涙と袖をしばりつくとふるおぞ。大夫やめてこの由を王に聞えあげたる。王大よ此義を美めその行を高しとして。兄弟ともこれをゆるして刑をせず。まよその母を賞

揚りて義母とちん稱せらる。王孫母と。齊の大夫王孫賈が母なり。賈年甫て十五にて齊の閔王と化ありたり。後、齊國亂きて王國をるおとあたむす。ひそか小のふいにてむしりあ。化ひよ淖齒といふものゝ爲に弑せられき。此時王孫母賈を謂りて曰く。汝毎朝家をいで、晩くあへるとなり。わき門に倚りて汝をまち。暮よいで、夜ふくるまで還らざる時を吾閨までいでむあへて汝をまてり。これねのづ

あらなる母子の情なり。今汝齊王の事へ王のゆくへをも究め。その恥をもさへがすして家よあり。これを君臣の情といふべきあり。とその志を勵まし、あが。賈自ら悟りて。やぶて市街の人多き所よいたり。令をつたへて曰く。今淖齒齊國を亂りて閔王を弑せり。余よ與して讎を復さんとおとふものを。右を袒げといひよ。従ふもの四百人餘もあせけむ。これと力を戮せ。つひよ淖齒を誅して國王の仇を復しけり。これ王孫母が義を重けて。よくその子を教へよせり。

程文矩妻

漢中の程文矩妻也。同郡の李法といへる姉なり。人これを穆姜といひ。所生の男子二人也。前妻の子を四人也。所生ける也。夫の文規、安衆といふところの令となりて赴任し。ほどもなく身まかりぬ。あつて後を前妻の子四人ともいとい頑^{カクマ}よて繼母よつる事^{カクマ}をせざ。何れぞり毀るゝとともおほりけり。されど穆姜を慈愛のこころ深るまゝに。隔てなくめぐみ字^{ヤシ}をひて。それ衣服など所生の子よ倍してよくけり。

或人これとあやして曰ひけるは。四子の不孝かむかり甚しきと。いふなればこれと愛することの切なるや。かゝる不孝の子を。こまを遠ざけて別居せしむるこそよからめといへ。穆姜いむく。あれ等志むしおを隔はる心もあらめ。やうくは義と以てこまを教へ導む。いので善ふ遷らでやい何るべきとて。ますく心をつくりける。偶そ長子の興といへるが。疾も罹りてあつらひ悩めり。と。穆姜側をまをせ。親ら薬餌を調^{テウ}てこれよす。め。いと懇よいさたりし。

ば。ほどへく疾なとりおくいえさり。此時興はト
 めて繼母の恩と感ト。他の諸弟をよびて謂りけ
 る。繼母の慈仁自然といふ。かむかり深きと。
 吾等いま、でその恩を忘らざりしを。實は禽獸
 の心よて。母の恩恵を多く深ければ。吾等の過惡
 亦隨て深ありき。其罪さりおとしとて。共は南鄭
 の獄といたりて。繼母の徳を告げ。おのまらの過
 を自首して。刑辟はあさらんとうたへし。おバ。こ
 の旨と縣吏より郡の守に具上せし。郡守その
 母の異行と旌表して。家役を蠲き。四子とを過と

あらためよといひさとして。その罪をゆるしけ
 り。後はい繼母のとしへは志とおひて。いづきも
 善良の士となりたりとぞ。穆姜年八十をこえて
 病に罹りあやふき時。諸子とよびて戒飭ける。ハ。
 わお弟伯度といへるを智達のをのよて。それお
 論むる所の葬を薄うするを。まこと小義コギをかあ
 へり。宜くこれ小隨ふべし。又人のとむりは臨こ
 て。葬を薄うするの遺言あるを。賢聖の法なきバ。
 汝等これとわする。おとなおれとぞとしへし。

陶侃母

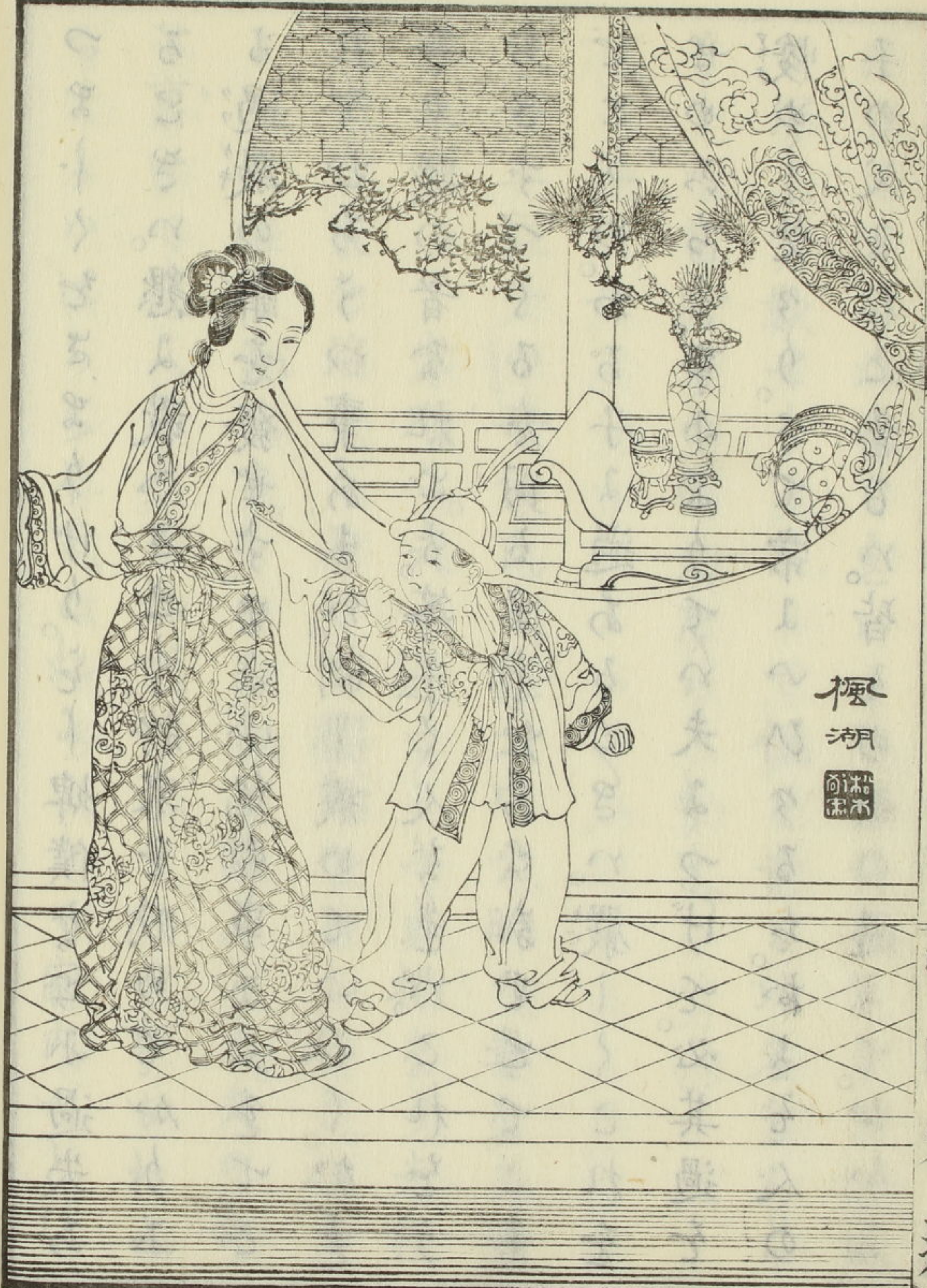
陶侃の母の湛氏といへるを。豫章といふところの新淦の生きたり。侃の父の丹。素と貧賤なり。侃を湛氏毎に紡績して従事してこれを資けたり。侃生まれて志いやからず。有為の才ありけき。友とえらびて交り。何そばしめき。年猶少きころ潯陽縣といふところの吏と爲りて。漁の事どもと監察せり。何ると此一坩の鮓を母の許に遺りし。母の湛氏その官物なると知り。書とそへてあへしつゝあし。侃を責めて曰く。汝吏とありて官物と掠め。これとねくるいそおはど何るまど

き事よて。たゞお喜びおもさぬのとならず。ことお憂を増すものなり。といたくいましめさしけり。初め侃が貧賤なりし時。都陽と云ふ所より。孝廉范逵といふ友人。來りて宿したる。おをりふし。冬の頃よて寒さをおはどし。雪いと深く積りたるを。湛氏とづらり臥すところの。あたらしき薦を断ちて。范逵が馬をくらせ。ひそめお髪を截りてこれを隣家に賣り。その價よて食物を調。らるよくしてあしなり。後お范逵この事と傳へき。その志の切なるお感。侃が人は絶れ

たるも實に此母なきに似たり。この子をうゑたれ。と深く賞歎せしむ。果して侃を竟し功名をあらそひて。當時その聞えたるの如き。二程母。宋の二程子の母侯氏を。程大中公昞の妻なり。舅姑は事して孝順。夫は遇する小貞操なり。夫程大中を家を治むるふいと嚴肅なまじかど。かりも敬禮を紊らさず。そのおと小謹ふらく。夫の命を稟けて後よあらざれば。いさゝかの事もわらうといはるらさず。これよりて家内いとしむ

つまづくをさまりけり。こゝ婢僕など小過失あるときい。懇と教へさとし。將來を戒めてかりふも過激の辭を發せず。まゝ小兒の事よふせて。これをむちうつ事あまは。制し戒めていそく。かき等卑賤の者なれども。等しく人なきは。これをうちさすづくるを何るまどおとあまは。こをどどめ。わが子よ過あるときい。厳しくこれをせめおらし。事ふよりてい夫よつげを。必其過を峻めし免たり。さて常よいひたるを。およそ人の子の父よねとせむる。皆その母の過よて。おやの

二程の母子を誡む



楓湖
印

たを母たるその姑息の愛も溺きて。子の過を蔽オホ
 ひかくし。父をして知らざらしむるあり。法ホひに
 過を改むるの期なきふよきりどぞかまける。
 ろく姑おとくいとかこき母ありけまば。兒子
 みな人よ絶タきて。つねよ飲食衣服の美惡をいそ
 ず。一モら學問をつとめけるふより。後モか大儒の
 名をなせり。明道先生。伊川先生といへるはすあ
 まちこれなり。宋の代よ名高き學者の多くをこ
 の門下よりいでたりとぞ。

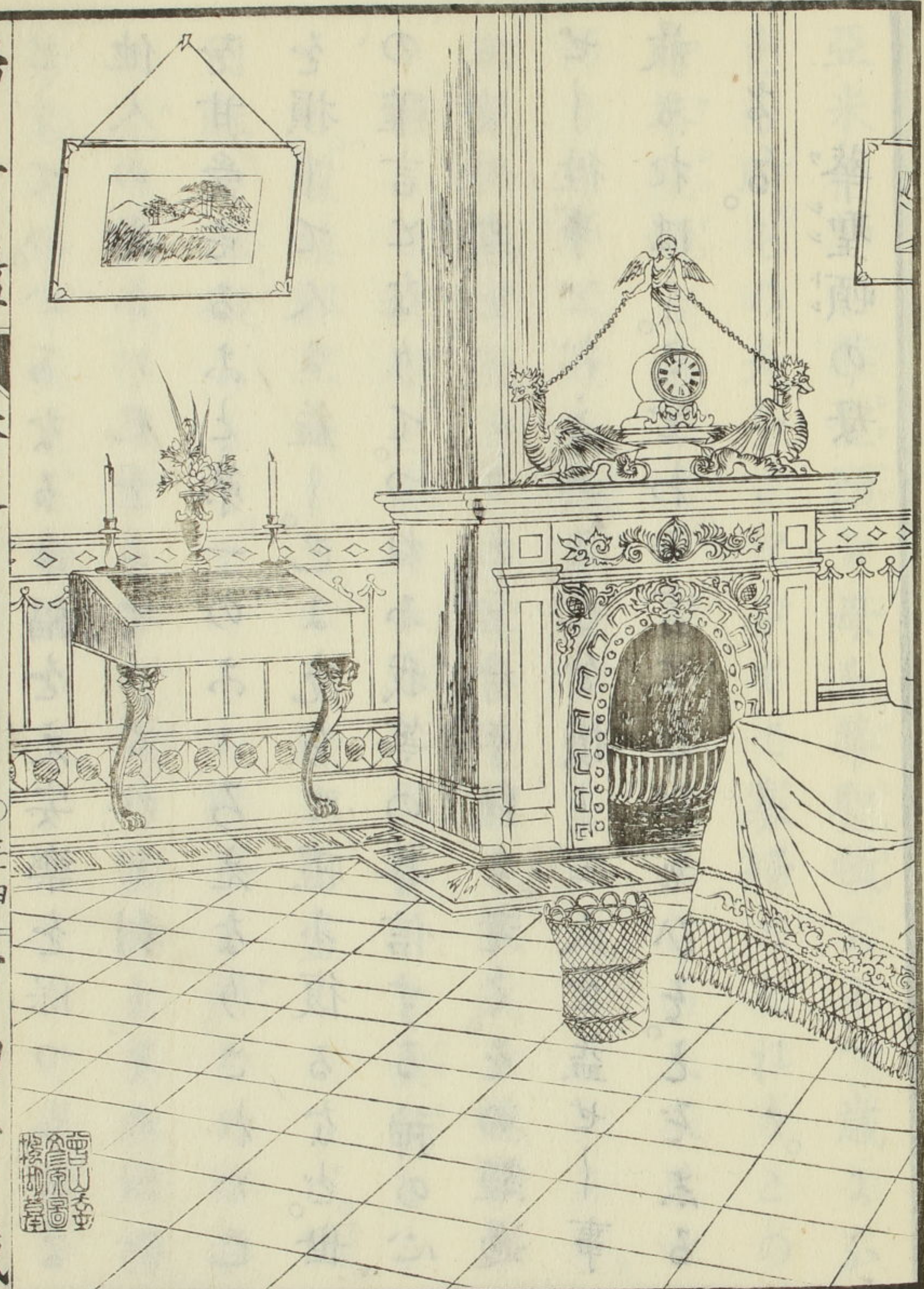
舌弗爾の母

和蘭國有名の畫工舌弗爾シエフエールの母を。その子と教ふ
 るふいと深切よして。儀表ホとすべきその多し。舌
 弗爾フエルの業を修めしとき。常よその身の衣食を
 節して。これふあらし。その資本となくけり。舌弗
 爾ル巴理バの遊學して有りける時。母より贈オクせる書
 を。その親愛の情。紙上よ何ふれていとよき訓戒
 あり。それ書よいとく。わらははこの書をかくと記
 の形狀をぞ。汝まの何たり見るおとあさまねむ。
 さばあまのいおもまぬなるべけれど。わらしの汝
 の寫影をとりいでし。汝を見まば。おがえず落涙

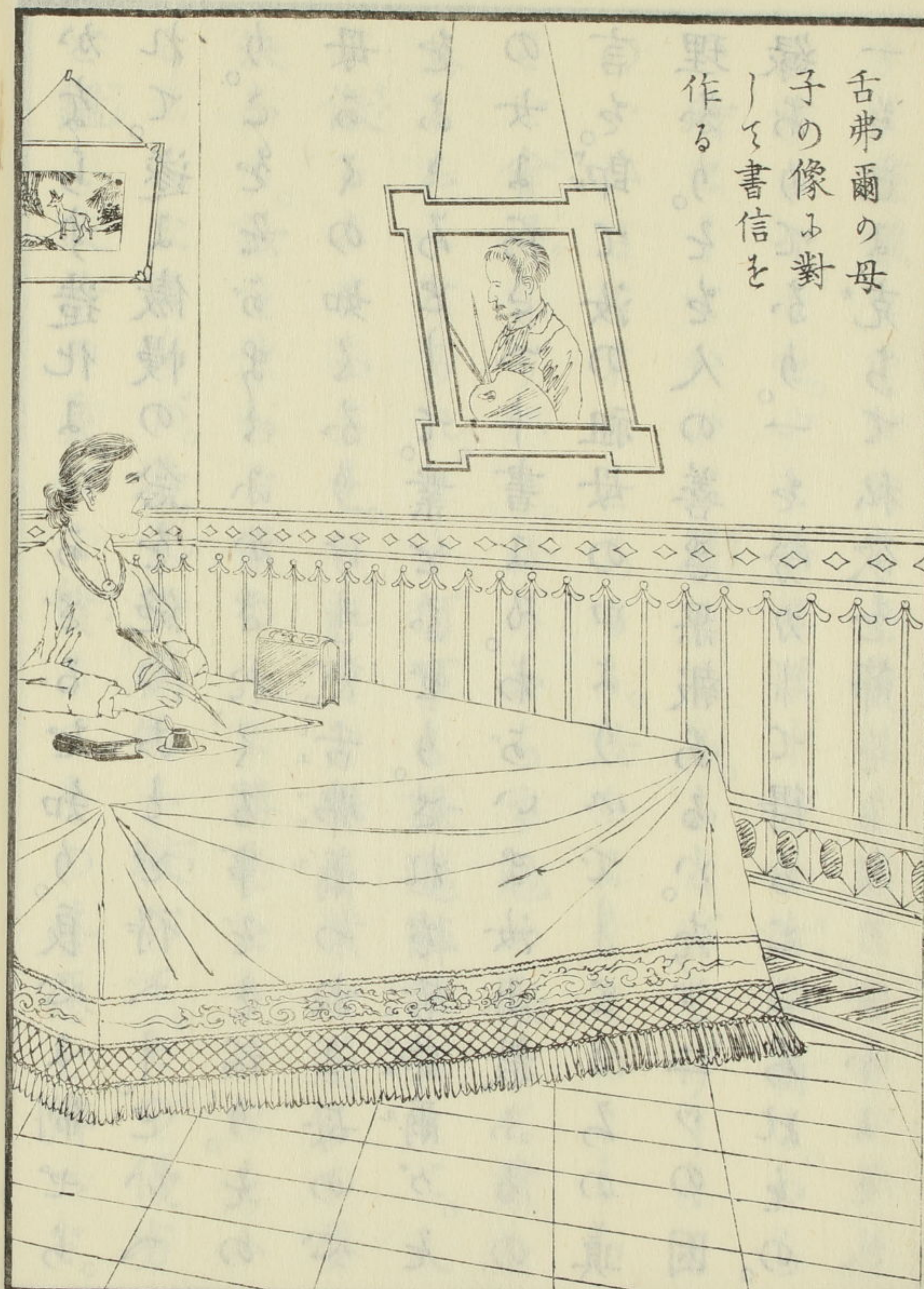
して畫像といおももせず。いとほしきひき
 ろするやうを。いとほしき汝舌弗爾よ。わら
 ひ時としていと厳そふ。あとばせげくも
 のいひさとすおとあるも。汝をよくそのことわ
 きと會得しうべし。汝のあらず勉め勵きて業を
 怠るおとなれ。まこと何事も謙遜辭讓しして。人
 と傲るおとあはせ。これ身を保ち業を遂るの要
 決あり。汝をしわぶ業の人と勝れたりとねとふ
 らるねらば。造化の萬物と較べて。その優劣
 と鑑と。又汝の良心と質してその善惡を辨へむ。

かならず造化よりおざるを知り。良心と制せら
 れて。遂に傲慢の念を絶つおとと得べし。といへ
 り。こそをそがまゝふかきねくる事どとあり。その
 母のくの如くふりけまば。舌弗爾つねに母の心
 をおろとして。業とあせり。されど舌弗爾がそ
 の女よ何とへし書よも。わがいま汝を教ふるの
 言を。即て汝の祖母の口よりいひて。ところの真
 理あり。そを人の善き果報あるい。たゞ二ツの因
 縁ありてふり。一を勞力して得るところは。その
 一を己よ克ちて私欲を節するなり。おろよそ人

婦
女
鑑
卷之四
三十四
宮内省藏



西山寺
繪



舌弗爾の母
子の像に對
して書信を
作る

婦
女
鑑
卷之四
宮内省藏

とてい。いなる幸福をえ安樂を保つも。常は
他人の爲小己を去て。これを利し。その損虧
を甘受するふと。第一のおゝるえなり。されば己
を損して人よ益し。己よ克ちて禮ふ復るなど。世
の確言となりて。つねお我等の尊信する神の心
も亦外ならず。いまわの身年既よ老く。その経過
せし往事をたふす。己を損して人を益せし事
最もたほし。ことわの言とおおとひと。とぞ志る
しる。

華聖頓の母

亞米利加の華聖頓の母を。華聖頓の十一歳よお
きる時。その夫をさ死ぶてて寡婦となれり。この
時華聖頓の弟もて。いとをさおきその五人中
ありしかど。母を類罕なる善良の人なりしあは。
幼児を撫育教養し。産業と管理し。家政を總掌し
て。些あも秩序を紊らさず。いと事繁しき豪家なり
しも。謹慎鄭重おして。心を職事よ盡ししあは。偶
困難の障礙あるも。よくその難事お耐へてこれ
よ克ちたり。さてこそ華聖頓の當時世界無比の
芳名をあらまし。その他の兒子も長くと後。とあ

幸福ありて身とたつる小至り。克く父母の名を
顯そしたま。兒子としてさる幸福の地位と導び
けるを他あし。このたふとく善良なる母の賜と
して。この賜をうけえてそのひありと顯そし
を。即ち華聖頓。その他の兒子となんありなる。

俄義的の母

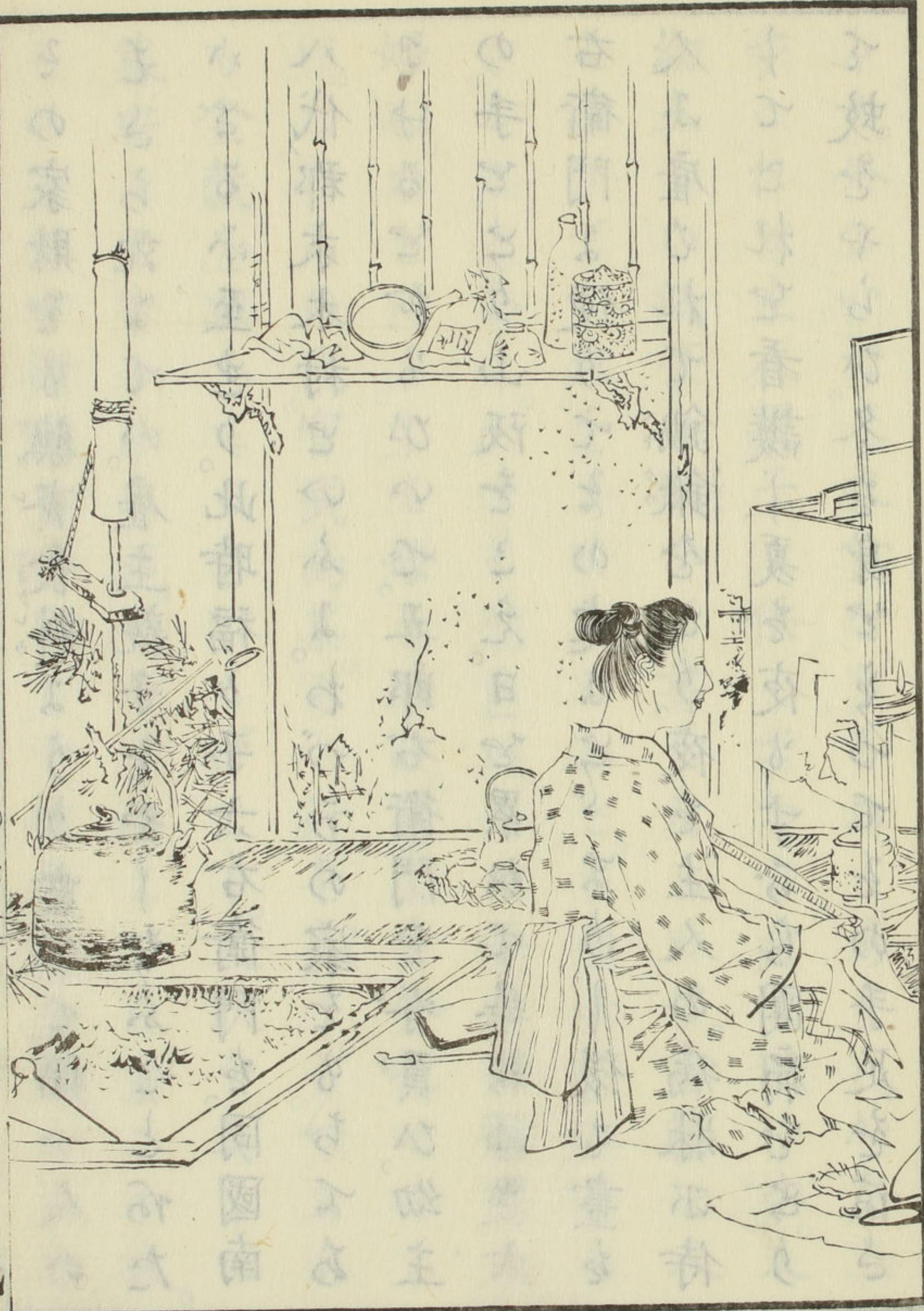
徳逸の名高き詩人俄義的の母を。資性寛仁大度
として。常と喜色面とあらたれ。真と人に母たる
の徳を備へたり。かゝれば。俄義的と教ふる
よその宜と適ひて。よく濟世の實事小意を用ゐる。

その身經歷練磨の効をうつして。これと教つ
る。俄義的も亦とえし業と。母の功業なり
とぞいひし。ある旅客この母と面會て。そのがさ
りして後。人と謂りなるを。いま俄義的の母とあ
ひて。始めて俄義的のかく大家とされる由縁を
ばしれりとぞいひける。俄義的の孝心の深
くして。常に母の恩恵をおもひ。人よもあたりけ
るが。ある時佛郎賀といふ所と至りて。先年母と
まどはりてある善うと人々を尋ねもとのて。
懇よいとそり。厚くこれとむくいとふ。

忠女福

福を。甲斐國都留郡忍草村の里長の雇人某の妻なり。不幸ふして蚤く夫を喪なひ。幼兒を育してよくその雇主に法をへけるが。雇主の五郎右衛門。癩病に罹りてたつおとあともず。加之その主婦も嬰兒を遺して身まらふかど。生計頓にねとらへて所有の田畑も悉く負債にあて。その日の烟もたてあぬるほどなれど。おほくの奴婢も暇とりて。主家と顧みるにのをたえてあ

りしを。福をおのが子の六右衛門といふをば。まだとさなれど他家に法をへしぬ。おのまひとりどがまりて。主家の為に心力を竭し。雇主五郎右衛門の病をいたむり。その幼兒を鞠育して急るおとなく。夜をひそお山神の祠に詣りて。雇主の病の愈んこととせいのり。あるひを溪川に禊してたのまお身まかへんこととせぬがみおど。りもさなく夏の日も。ふりこほるふゆのよもいとふことなく。精神を法くして懇禱せしおども。その志るしなく。いついぬべしともええす。ま



福主父子
を救済を



櫻湖

その家財をも薬資食料より盡して。福一人の
 もたらたててい。雇主親子をやくなふこと何た
 いざる小至きり。此時福が子六右衛門を。同國南
 八代郡末木村といふよ。わづらの家をもちてあ
 りけるとおもひいで。五郎右衛門を脊負ひ。幼主
 の手とり山阪をこえ。日と累ねて尋ねゆき。六
 右衛門より便りてその處よとゞまりし後も。晝を
 人小雇されて鋤鋤をとり。夜を主人の病牀小侍
 してこれを看護し。夏を夜もすゝら團扇をとり
 て蚊をやらひ。冬を身とどつてその手足を何と

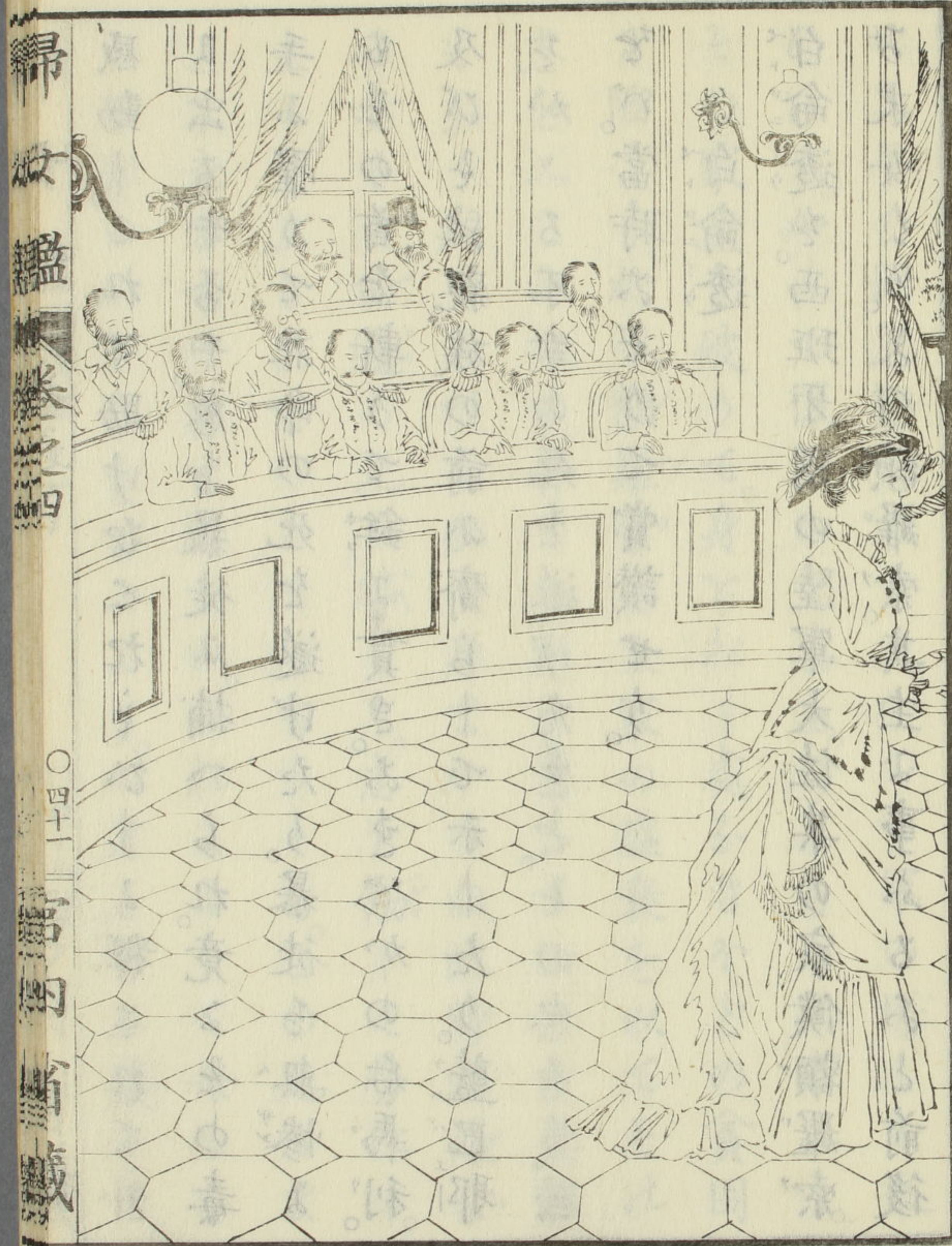
とめ。外よいで。衣食をうるおとあまは。かなら
 ずこれと主人親子より供してわづら身よはけず。又
 幼主よ紙筆を購ひて書をならいせ。書籍を人
 より借りてこれをよましめおど。その辛苦いさら
 ざることか。かゝりけまは。その子六右衛門夫
 婦も。力をたくりて母を助け。舊主を介抱せしあ
 ば。とこのるの代官武島某。その行を嘉し。とづら
 も金穀を與へてこまをば。又狀を具して
 幕府より上申しけまは。やぶて福よ白金二十枚。
 その子六右衛門より同く十枚を賜ひて。その忠

孝を賞せられけり。こも天明八年二月ばりの事なりき。

藍巴耶

藍巴耶夫人を。一千七百四十九年の九月。伊太利の都林に生る。人小嫁して間もなく夫を亡ひけり。年尚若かりけき。艶麗温和にていと富有なる寡婦なりき。されば選られて。法蘭西王路易の后馬利安兌業の侍女となり。大いにその信任を得ぬ。さると王家の不幸に當りて。后を難を避て瓦連努に遁れ。志士のほど身と匿されけり。此

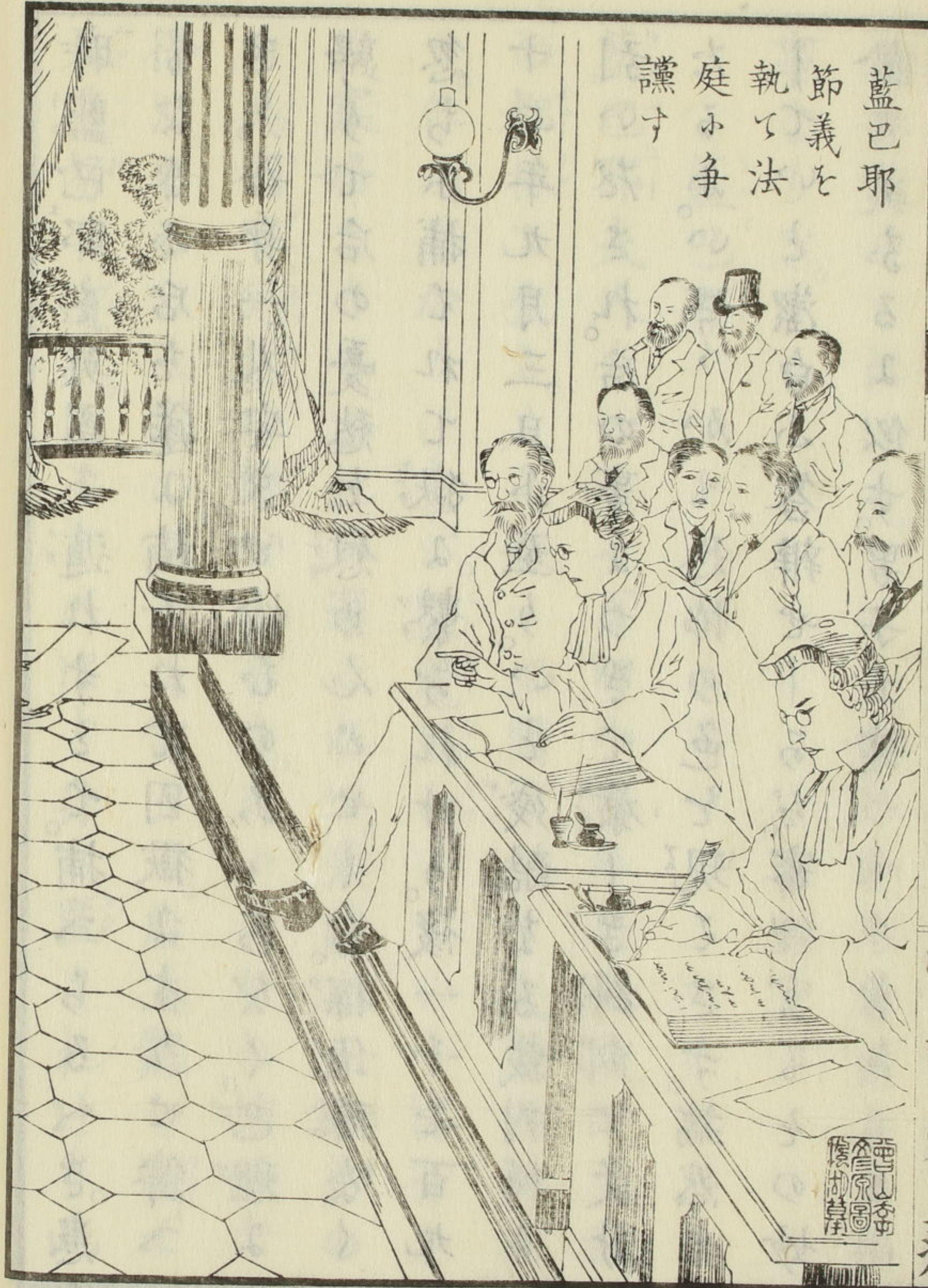
時藍巴耶を英國小遁れすにて。捕へらるべき患もなき小。后を遂に捕られて囚獄に在りと傳へき。吾身一人安きと愉むのおろなく。巴理に歸りて後の憂愁を慰めんとせし。探偵隙なく忽ち小捕られて獄に繋ぐれけり。後一千七百九十二年九月三日小至り。いと残酷なる裁判所より引いだされ。後の事につきて厳しき糾問を受けたる小。いさゝかも恐怖の色を現とさず。端然としていと潔白小答辯せし。審理官もその妙齡秀美ふるに似ず。男子も愧づべき勇氣ある小



婦
女
鑑
卷之四

〇四十一

宮内省藏



藍巴耶
節義を
執て法
庭小争
謙す

婦
女
鑑
卷之四

宮内省藏

西
山
李
慶
昌
印

感動し。これと助けむとれをひし。釋されて外
に出るや否や。忽ち暴徒に捕へられ。竟もその毒
手小罹りて非命の死を遂げたり。暴徒を無惨に
もその首を斬りて鋒に貫きおきてかの后馬利
及びそれ親族の前小齋らして示したり。藍巴耶
をかゝる不幸の死を遂げたをど。その忠勇義膽
をば。當時おどりて賞讃せり。

白命透

白命透を。西班牙國の陸軍大佐某の家僕額羅索
お末女なり。父の額羅索。其主に事ふるおと前後

廿五年の間忠勤怠りなく。かつて軍の場にも従
ひけり。かくて後その主某を。ありそめ此事より。
その家産を破りて。身とれく處おさやどの貧困
に陥りしかど。額羅索を主家の盛衰を以てそれ
志をニツ小せず。善くこれに事へし。いくやど
もかく病よわづらひて身おかりぬ。此時額羅索
お妻を白命透お兄と等しく。志を勵して勞作し。
主に事ふるおといとまめなりし。この兄もま
ご不幸おして身おかりぬ。これよりて母もそ
の不幸のかさおきるおより。心身ともお羸きて。

復し勞力は從事するふとあるはむ。かくて後を
 白命透ペトロニトウとその姉と。二人の之健全なまむ。かこ
 りて、ろをあませて。刺繡スシの業も從事し。病母を
 養ひ老主も仕へし。姉の某も亦過度も勉強せ
 し故を以て。不治の病ふかり。復び業と執るお
 と何ともせず。かゝりけむ。まむての不幸をむ。竟
 り白命透ペトロニトウの一身も負擔フタするふ到まり。されど白
 命透ロニトウの爲し志を挫クらさず。倍氣フクキをまげまゝしてその
 身の寢食と欠き。あは三人を保養せしむ。いさ
 かよわき少女壹人の身に堪へむつべき。あむし

のやど小身體瘦せ衰るへて。いとあまれなる状
 あり。近隣の人見る小忍びず。あまむ。爲しはか
 りて美食などあまふ。おとあまむ。なや自らい
 食せむして老主もあまむ。その心を慰ナグサめ。冬の寒
 さ小温衣キモを與ユふるもの何まむ。これと姉の身も
 めさねしめていたむるなど。女の手ひとつもて。
 よくこの艱難もたへ。いさゝかも節義の志を撓タ
 めず。終始一日のおとくなりし。これ全くその
 父額羅索ガクの行事と模範とあせしめて。實は殊勝
 の行ひとぞいふべき。

若安達亞克

若安達亞克を。一千四百十年。法國の屯列米と
 ひつる僻地の村落小生る。父母をいと貪りき農
 家おまわ。其女を教育するの資力あらねど。正直
 小して神を信ずるおと篤おまわ。若安も
 常と敬神の道理を説きおせたり。かゝりけれ
 ば生長する小従ひて。敬神慈愛のおゝる深く。そ
 の身の窮乏をば顧みず。常と貧者と恵み。病者と恤
 ん。無怙のものと助け救ひて。その善行と娛み

けり。當時法國を阿連斯白根的。兩黨の軋轢甚
 く。互と權を争ひて國內大と亂き。一日として安
 きおとなかりけり。英王顯理第五世を。この虚小
 乗トて法國を併せ領せんと欲し。親ら大軍と將
 とし破竹の勢とて法國と入り。攻むれば取り。戰
 へを勝ちて。至るところ風を望で歸降しけまわ。
 遂と巴理を略取り。やぶて法蘭西王の位と即け
 り。此時おや英王と服せざるを。唯り南方の諸州
 のとかりき。おくて英王病とわづらひて身まら
 じしおわ。其子顯理第六。英國の王位を襲ぎ。益兵

と發して法國の南部を攻撃せり。是よりさき。法蘭西王沙爾第六世を。心疾に罹りて人事と省こざれば。太子沙爾代りて國政を執りしに。英兵の爲る巴理を襲われて。波亞疊に逃走せり。英兵に至るところよて都邑を劫掠しけむ。人民擧て兵禍に罹り。その慘狀言ふべからず。若安之を見て憤激し堪へず。いふで驕傲ある英兵を掃攘して。法國を快復せんとかもひ。自ら人よ謂りけるを。わき初めて神の靈異を見し。十三歳のときよて。その形狀を赫耀たる神靈あり。余よ告げて

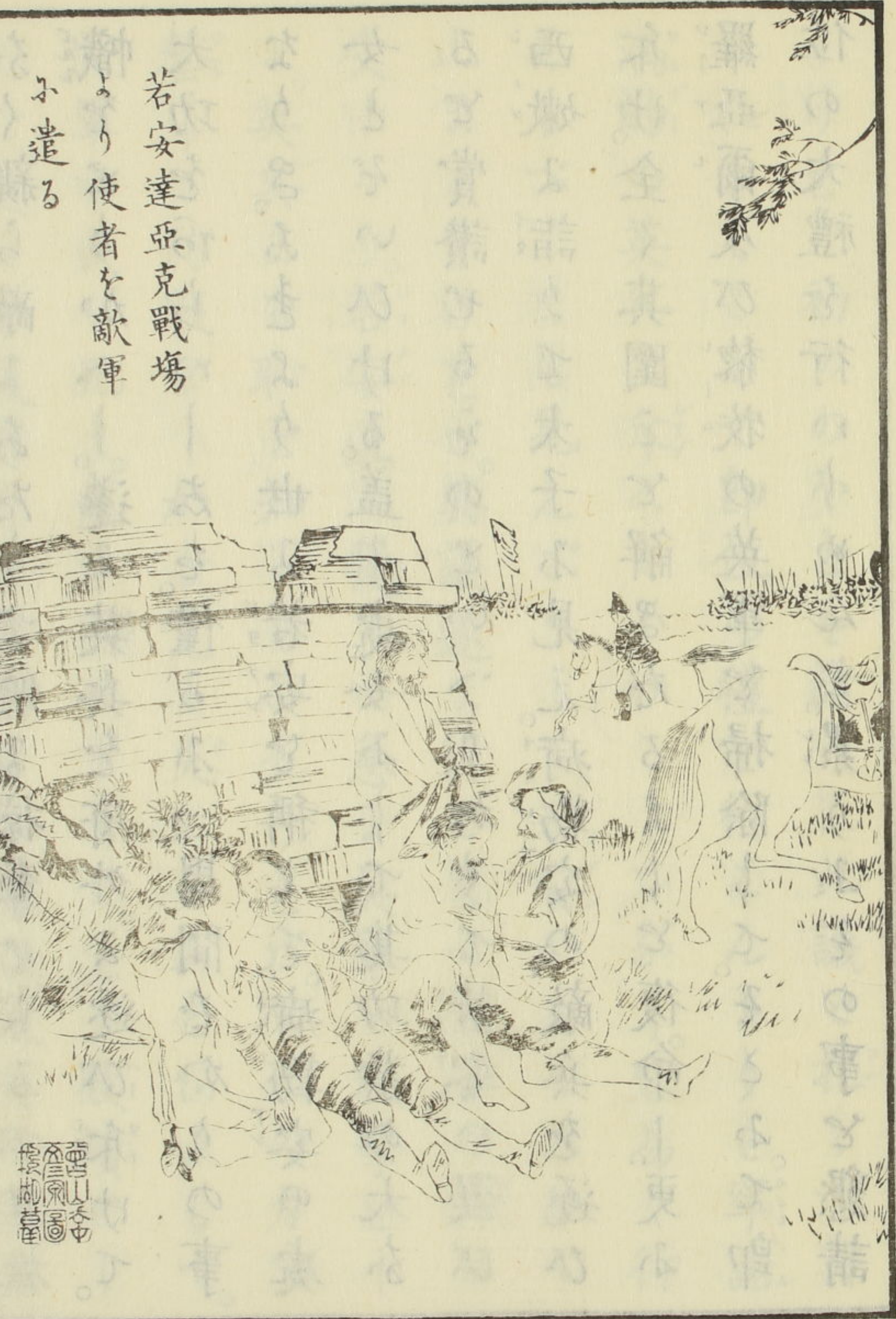
曰く。汝常よ神を敬し。善事を行へ。神を必汝を保護すべしと。爾後晝夜の別なくその聲常よ耳に断えず。今をわれ神の冥助に依りて。兵馬の權を握り。敵兵を打靡け。太子沙爾を奉りて。黎牧府に即位の式を行しめんとおもへり。とぞかとりける。人々これをき。或を駭き或を嗤ひて。信するものいなかりけり。されど若安をその叔父の許よいたり。素志を告げ。紹介を乞ひて。窩哥羅爾の令小見え。所見を説きて薦擧せられんことを懇請せし。令小之を信せず。必狂女あるべしと

おとくを斥けて用ゐる氣色もなかまけり。若安を爲す屈するおとなく。復び叔父の家へ歸り。その計畫をるところと述べて。法國を再造するものを。羅來内近傍の處女なり。と此豫言をやおてたのを若安がおとふり。と公言して息まざりけり。かゝるやどふ。法國の運命いよく傾きて。太子不屬する所の城砦をひとり痾勒安の一府のこあるを。これと英兵の爲す圍まれて。その危きおと旦夕と迫る。と。此城陥らざ。法國腹心の地。擧て英國の有る歸すべきの勢あり。此時守

令。若安の言を信ざるおを阿らねど。他は爲ん便なけむ。試し紹介して太子を拜謁せしめんことと諾しけり。之より若安が喜び譬ふるも。のなく。馬を跨り劍を帯び。西媿をさして旅立ちける。彼の暴戾ある白根的黨の居地をも恙なく經過し。十日あまりを経て西媿に達し。太子お見えて。さづからこの國難に當らんことと請ひたり。太子沙爾も始のやどを其説を信ぜず。とた敵兵の爲す嗤ふことと慮り。或を僧侶よ委し。或を學校に托して。こを試檢せしめ。其言

ふところいさゝかもみだをぞして。他も異いむ
 べき事もあらねば。竟も其請ふ所を聴し。これ小
 兵若干を假し。疴勒安の援兵として遣したり。
 若安いさゝかその素志を達するの時をえ。甲冑
 身と固め劍を帯て他の將卒を帥る。疴勒安を
 さして馳せつきぬ。こをふよりて府兵を輶鮒の
 江河よいでたるおとひとふし。喜ぶおと限りあ
 く。勇氣忽ち快復し。英兵の銳氣為し挫折して。戦
 いざる小勝敗豫め判せり。若安やがて使を英
 の陳中よりやりていもせけるを。汝等速らふこ

を去るべし。若し然らずば悉く殺戮を加ふべし。
 といひ遺りしかど。英の將軍等甚しく之を憤や
 り。使者をとらへて禁獄し。いたく侮辱を加へけ
 る。兵氣為し屈して。心中陰にお若安も豪膽も
 恐怖しなり。城中の兵を勇氣日ごるお百倍し。い
 さこさくみて英兵の砦におよせをめ撃たれ
 ば。英兵もあつとまてと防戦頗るかめしかど。
 遂も若安も為しせめ落され。つゞいて他の堡壘
 とも何れと失ひたり。此時若安の敵の矢を負ひ
 て危きおと何れつせど。いさゝかお屈するおと



若安達亞克戰場
より使者を敵軍
不遣る

徳川
御
筆
印

かく。親ら敵にあたりて。將ら掠奪せらるべき旗幟をとりかへし。遂に英兵を府外に逐ひ斥けて。大功を向らひし志を。僅に一周間むかりの事なりき。おまより世に若安を稱して。疴勒安の處女とぞいひける。蓋し處女にして。其功業の大なるを賞讃せるものといへり。かくて若安は復び西嬪に詣りて太子不見え。疴勒安の敵兵を逐ひ斥け。全く其圍を解きたるよしと復命し。更に羅亞爾及び黎牧の英軍を掃除して。そこ小て即位の大禮を行はしめんと。累りおその事を懇請

しけむと。初めのやとを諸大臣此議と拒みて許されど。そこ小て即位の禮を行むんよりを寧諾満的の英兵を斥らるお如らとあし。容易く行たるべしとも見えざりし。若安かこくおひて止まざるけむを。其議遂に行をせし太子の許を受けたり。若安直に發して急に英軍を攻撃せし。英兵も恥を知るもの多けむ。必死の力と聲して防戦せし。かど。竟に支ふるおと向ともで。將軍中或を死し。或は囚となりて。全く敗績せしかむ。是より後諸府の圍を自ら解け。敵兵降旗と

樹て、軍門に降参せり。千四百廿九年の七月、太子沙爾め、たく黎牧府に入りて、即位の大禮を行はれけり。かくのごとく若安が志をたて、大功を奏せしを、其間僅に三月と出ざりしと云ふ。かくて若安の功なり名とげて、其業全く竟へしかば、兵權を奉還して、舊里に歸り、天命と娛まんことと懇請せしかど、許されず。尚將軍の印と帯びては、あへず。やどへく後、昆平の戦は終に英軍に虜とかり、妖魔の術を行ふ者とせ、誣告と被りて、火刑に處せられけり。若安の其身賤民

の一處女にして、勤王愛國の志深く、一命を棄て、國難に瘡り。この大功を奏するに、不幸にして敵手と墮ち、竟に極刑に處せられしに、實に憐むべきおとふことを。

撒拉倍涉

撒拉倍涉は、米國費府の商人カ查倍涉の妻にして、便惹憫佛蘭格林の女なり。父の佛蘭格林は、獨立戦争の時、國の爲に大勲と立し人ありけり。其女も常より之を見聞して、自ら愛國の義務に當る小慣れたり。一千七百八十年の冬、寒氣殊に當

酷シかどけまへ。爲よ兵士の戎衣を製する事よ
カと竭トけり。此時沙斯レ的路侯親ら倍涉トと訪ひ
て。そ此訪問の事どもと委曲ラのふ記志し之のあ
り。曰く。倍涉夫人ハ。實よ佛蘭格林ノの女たるよ恥
ぢず。予かつて夫人小見えてその徳行を知らん
とねまへり。望むふしからず。果して態様ハ簡
易トふて虚飾ヲなく。よくその父よ似て慈善のこゝ
ろいと深し。夫人予と誘ヒて一室よ至るよ。此室
ハ費府ノの諸貴女等ハ。新たに調製せし物品と陳
列するの所なれど。定めて刺繡ニ錦綺ト等の華美と

盡せるものならん。とねもひのゆるふ。こゝ賓西
注尼ノの兵士の着るべき膚衫ヲふて。これみよ諸貴
女等ハ。自己の貯財と捨てし。リンネンノ麻布ノ良
を買ひ。喜て自ら裁縫せしものなれば。品毎よ製
主の名と記したり。其數ハ二千二百の多き小居
まりとぞ。その後馬裴トと云ふもの書と佛蘭格林
小寄せて曰く。倘し歐洲に住きて家計及び國家
よ對するの義務を竭さんと欲するもの。その師
表ヲを要めば。予を倍涉夫人と以て之小充んとね
まへり。夫人を先年數月の間よ賓西注尼ノの諸貴

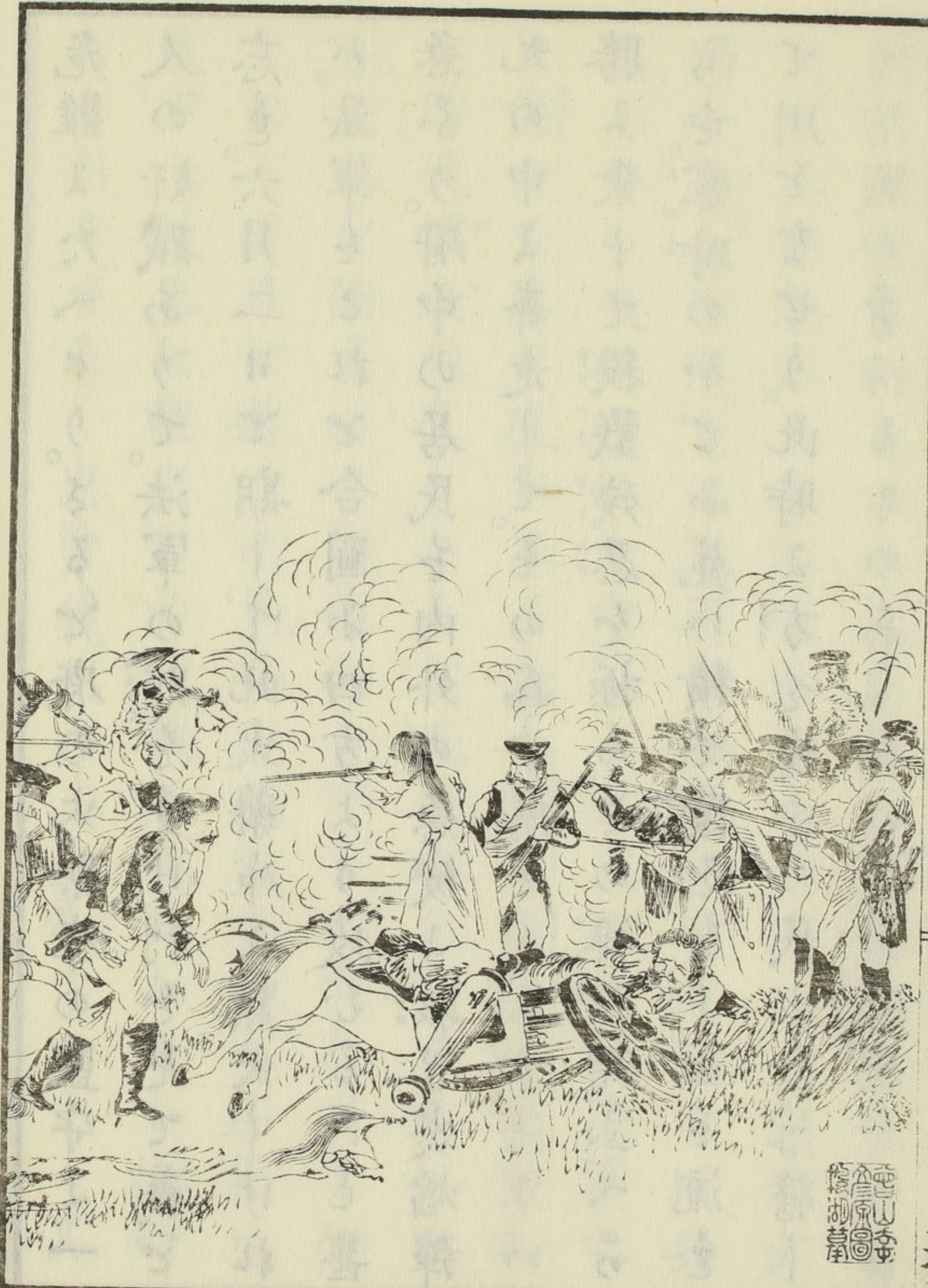
女を懲^{シユウ}憑^{コウ}し。之を以て愛國の心を起さしむる小
 従事し。其能辯を以て遂に財と勞とを厭はず。多
 くの膚衫^{ハダカ}を製して。米國軍人の過半に給する如
 き偉功^{オホイサナ}と遂げたり。此の如き非常の目的と達す
 る。お爲よ。忍耐勇敢なりし。結瓜^{クワ}宗徒^{ソウテ}。耶蘇教^{イエス}の
 名^ナも。尚之小い及むざるべしといへり。倍涉^{ベイツエ}夫人の
 艱苦を耐へて。許多の仁恵を施し。又好く時機小
 投して目的と誤らざりし。實に希有の行よ。
 永く米國婦人の模範となせり。一千八百八年齡
 六十四小て身まゐせり。

亞俄底那

亞俄底那を。西班牙の薩拉^{サラ}痾^コ撒^サ府^フの生を小て。一
 千八百八年のころ。薩拉^{サラ}痾^コ撒^サ府^フ法國の爲に圍ま
 せ。危難と極めし時。拔群の大功と顯る。世小稱
 せられし勇婦なり。を薩拉^{サラ}痾^コ撒^サ府^フといへる。い
 布爾^{ブル}奔^{ボン}家の王旗を樹し。所あるを以て。法國兵と
 遣りてこれを攻めしむ。然る小此府固と城堡の
 設けなく。唯僅る小墻壁^{キヤウヘキ}と繞らし。たれど。これを
 たやれ損なむ。憑む小たらず。加之。と距
 る。おと一里許の所。よ高き丘ありて。敵兵府中を

觀ふに最も利ありて。府兵の爲よを頗る不利なり。又兵を數ふるよ二百餘ありて。他いふは老少婦女のよ小て。をの用よたつべくも何らば。兵器とてを大砲僅ふ十六門ふ過ぎざれば。法軍之を侮りて急よ攻るよとなく。竊ふ以爲此府をたゞ僧徒懦夫の在るのよとて。さのよ力と用るよざるも之を陥まんの容易るよとて。たゞと不まじく日と送りけり。之ふ反して府の居民の衆心一致死を輕んとして防戦二月とふるも撓むよとなく。まき忠勇義烈の志を勵してよく其

危難よたへたり。さると府の火薬庫の監守よ一人の奸賊ありて。法軍の賄を受け。利を見て義と忘き。六月二日と期して此火薬庫よ點火しければ。法軍をこれと合圖ふ四方より攻むるよと甚急ふり。府中の居民を内外の急變よ駭き。炎焰彈丸の中よ奔走して。その爲す所をしらず。法軍の勝よ乗とて殺戮殘忍を極め。その慘狀謂ふべからむ。霎時のよど小屍の積で陵をなす。血を流きて川をなせり。此時よ方て府中の民よか落膽して。防戦の勇あるものあらねば。薩拉疴撒府の存



徳川
御
蔵



亞
俄
底
那
敵
を
却
け
て
軍
功
を
奏
す

亡實は縷毛の如く。將よあゝに絶えんとせしむ。ばららざりき一人の處女ありて。身よを白き衣と着かきとふしみごし。十字架と頸よ懸けて。那斯多拉同拿の禮拜堂を出でたり。人々驚きてこぞとこる小眉秀で眼すゞやふふして。眞は神女の如くなる。徐ろよ歩と進めて。彈丸雨注の場よ來しとき。一砲卒の丸を裝めて未だ發せざる小敵の飛丸よ中りて重傷を被り倒きたれば。彼の處女直小其手より火繩を取りて彈丸と敵軍の直中よ發し。發しては裝め。裝めては發し。其

間小の頸よ架けたる十字と吸ひ。大聲よ死ねよ勝てよとよむる聲。忽ち軍士の耳に入り。兵氣為小十倍し。この敗軍を支へる法軍と打靡けし。宛も天兵の冥助と得たるが如く。衆口同音に亞俄底那萬歳とど呼たりし。此よ於て法軍大よ攻めあぐみ。その後を再び遠巻して時々破裂彈を發し府中と惱め。自ら糧食の竭ると待ちけり。されど府中の艱苦譬ふる小をのふく。その危きおと累卵の如くなまごも。亞俄底那を勇氣倍熾ふして。日夜彈丸破裂の所と廻り。傷者と助けて

これを勞とり。疾病飢餓ふ苦しむとのど。薬と
頒ち食を與へる恩恵と施し。益防戦の志と鞏
うせり。されど法軍も亦勇敢より少くも屈せ
ど。竟る薩拉疇撤府の一半と攻取りしを。今を
全勝の期來せりとおもひて。使を府に遣り。首將
巴拉忽克を降参とす。めけむ。巴拉忽克も如
何よこれよ答へむと。亞俄底那も示し問ひけり。
亞俄底那は法軍の傲慢無禮と憤りて。其不可
なるよと極言せしむ。事ならずして。之より
戦闘も甚く烈しく。兩軍あひ迫り。彈丸空に飛び。

各街各所處として戰場ならざるをなく。一府恰
るも火山と觀るが如く。十一晝夜の間。残忍殺傷
の區とあせり。其間亞俄底那の衆も先んじて府
兵を勵まし。劇戦せしむ。法軍次第に敗走し。八
月十七日の曉天より。残らずこれを撃却けたり。
此時全府人民の喜悦の譬ふべからず。全くその
功を亞俄底那一人に歸せり。首將巴拉忽克の死
者と追賞し。有功を慰するふあたりて。まづ亞俄
底那の全府の危急を救ひたり。偉勲と賞するの
方法を議せしむ。更よあせむ報ゆべきとのなけ

せむ。彼が欲する所より従ふんよりいふとて。や
 びてその所好と言ふに。亞俄底那の敢て
 功を誇らず。たゞ機關手の位に在りて。薩拉痾撒
 府の徽章と佩用するの特許を得んことと乞へ
 りとぞ。その後身清貧ふ安んじて。一千八百二十
 六年より身まかりける。世の人おとあづてなげ
 きをいまぬをあらまけり。

婦女鑑卷四終

